

一日の始まり

土師 猛

眼を開けると、遮光カーテンを透った朝の籠陽があった。
腕を伸ばし、ラジオのスイッチを押すと、聴いたことのある心地良いシン
フォニーが流れ出した。
いつものようにレースのカーテン越しに、窓を開ける。
裏山の森林公園から爽やかな風が、侵入してくる。
朝の光と空気が重なり合った部屋の中で、クラシックを楽しむ。
そろそろ起きなければと思いながらも、ベッドに貼りついてしまう。
軽い空腹を感じ、身支度を整え、クロスモールの喫茶店へ残暑の街路を向かう。
昨夜降った雨の水溜りが、あちこちと点在している。
[いらっしゃいませ]
[お早よう]
マガジンラックから朝日新聞を取り出し、空いているカウンター席に座る。
顔見知りのウエイトレスが、笑いながらやってくる。
[いつもの……]
[そう。世界一おいしいコーヒーと、スクランブル発進を]と、使い慣れた
ジョークでモーニングサービスを注文する。
朝日新聞が募ったエッセイ[あなたがつづる。おやじのせなか]の優秀作品
〈酸っぱいおにぎり〉に、目が止まった。
父親と娘の照れくさい関係と題する講評を読んでいるうちに、父娘の似た者
同士を書いたこの作品がどうしても入手したくなった。
事情を話し紙面を借りて、隣のイズミヤでコピーをとる。
[いよいよ、芸術の秋ですね]と、帰りにママに声をかけられ、戸惑ってしま
った。

注、このエッセイは2007年9月に執筆したものに今回加筆しました。